
ガーデンボックス

東風丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガーデンボックス

【Nコード】

N6273K

【作者名】

東風丸

【あらすじ】

新たなる力は、人を何処に導くのか。

新エネルギー【魔素】が発見された世界の物語。

オーメッド独立研究所はも最先端の魔素研究施設。

そこに所属する研究者達は、誰よりも世界を知っている。

人類の先頭を歩むものたちは何を選びとり、何を捨てるのか。

研究所に所属する3人の研究者はそれぞれの道を歩き出す。

愚者の行進（前書き）

新エネルギーによって進化した科学、新しいことが判明するのに伴って発覚する世界の不明瞭さに立ち向かっていく？物語です。

主人公はこの世界で生きる全てのもの・・・なわけはなく、もつとも世界の真実に近い人達と、その周りの人たち。

世界の在り方を大きく変える方法が有り、その方法を知っている者は一体何をするのか・・・

まだまだ不明瞭な魔素というファクターに対して、無知なる人類はどうアプローチするのか。

ガーデンボックス【愚者の行進】では、未知の領域に立ち向かうオンラインメッド独立研究所の研究者達にスポットライトを当てて物語は進行します。

未知の領域という設定なので、特に世界観の説明が多くなりそうです。

愚者の行進

オーメッド独立研究所第2区画　ルメル・アーメッシュの部屋――

ばさばさばさっ！

紙が擦れる、乾いた音を立てて大量の書類が室内に舞った。

「――もうムリ。そもそもあたしにゃ机仕事なんて向いてないのよねえ……」

さあって、実験室の様子でも見てこようかしら」

タイトなジーンズをはき、黒いTシャツの上に白衣を着た赤毛の女性、言い終えると同時に先ほどまで座っていた椅子を勢い良く後ろへ倒しながら、机に飛び乗った。

……しかも土足で。

このお世辞にも行儀の良いとは言えない女性は、オーメッド独立研究所の第2研究区画長、ルメル・アーメッシュ女史だ。

外見からして、年齢は20代後半になるかなるまいかといったところか。

背中ほどまである長い赤毛の先を黒いリボンで束ね、白衣のポケットに眼鏡を引っ掛けている。

容姿を説明するのに流麗の一言で済む、美人とはこういう人を使うのだ、と他人に説明するのに打って付けの美人である。

長い睫、髪と同じ真紅の瞳、そして計算されたように整った妖艶な肢体が色香を漂わせている。

「はあ……」

部屋の中にもう一人、ルメル女史と同じ顔をして、彼女と同じ真紅の髪を肩で切り揃えた女性が溜め息をついた。

彼女の実妹で、第一研究区画長であるサリア・アーメッシュ女史だ。

「・・・姉さん、私が居る前でそんな暴挙が許されるとでも？」

少だけ凄みを利かせて姉を制止するサリア。

「うつ・・・い、いいじゃないの少しくらい！」

ここ最近、書類の処理ばかりで腐りそうなのよ！」

そもそも書類が溜まっているのは、自分が今まで溜め込んできたからだというのに、ルメルに悪びれた様子も無い。

大人びた外見とは裏腹に、彼女には子供っぽいところも有る。

好奇心旺盛なところや、自分の手で体験したところ、知的探究心が深いところなどは彼女の研究者としての人生にも多大な影響を及ぼしてきた。

研究者としては、いわゆる実践派の研究者というヤツか。

「ホラ、ねえさんが仕事しないで困るのは下の人達なんですから、しっかりしないと」

ふてくされて仕事をはじめようとしないルメルを、サリアはまるで子供を諭すような口調で諫める。

「む~~~~~~~~」

そしてまるで子供のように頬をぷくーつと膨らませるルメル。

「・・・ねえさん？ だいたいねえさんが書類の提出期限を守らないから私が所長から言われてこんな・・・」

「あー、はいはい、あたしが悪かったさね。以後、気をつけるよ」
「口だけじゃないでしょうね？今まで何度そう言って・・・」
そうして、くどくどと説教を始めるサリア。

「いいですか、そもそもねえさんは・・・」

初めはルメルも黙って説教を聞いていたが、説教が始まってから5分を過ぎるかどうかというところで我慢の糸が切れたようである。

「あー、あー、あー！」

突然、話の途中で声を上げてサリアの説教を遮った。

「・・・あーもう五月蠅い。これからさっさと片付けるから出てけ」
いかにも面倒くさそうな、うんざりとした顔をしながら、しっしっ
と手を払っている。

「・・・ハイハイ、分かりました。」
サリアは少しだけむっとした表情を見せたが、すぐに不満を飲み込みながら背を翻して廊下へ繋がるドアへ向かい、ドアノブに手を掛けたところで立ち止まった。

「・・・あ、そうそう。ねえさん？」

わざとらしく、後ろで机に脚を乗せて書類を睨むルメルに声を掛ける。

書類に眼を落としたまま、ルメルが反応する。

「んあー？何さー」

「あと30分ほどしたらガーラントが様子を見に来るそうです」

ガーラントという名にびくっと体を震わすサリア。

「そういえば、最近コレクションが増えたとかで喜んでいましたよ？」

サリアが戦慄した理由は彼女の弟の趣味である、“コレクション”にある。

「・・・あんまり知りたくないけど、一応聞いておこうかしらね・

・
あいつは一体どんな物騒なものを手に入れたわけ？」

「えっとたしか・・・アイアン・メイデン？」

「・・・つつっ!!」

満面の笑みで言って、ばたん！と音を立ててドアを閉める。
後ろでは、

『あの馬鹿弟・・・！

って、うきやーーーーーっ！』

ばさばさー、がったーん！

と、絶叫とともに書類の山が崩れ、椅子をひっくり返す音。

（さては盛大にひっくり返ったかな、うふふ）

サリアはにやりと暗い笑みを浮かべながら、これで気が済んだ、
でも言うように背伸びをした。

「さて、これでねえさんも仕事をはじめるだろうし、私も自分の部

屋に戻りますか!」

サリアは自身の仕事にとりかかるべくその場を後にしようとしたが、

「ちよっ、ちよっと!」

ばたん!

後ろでドアが開く音とともにルメルが飛び出してきて、とんでもないことを言い出した。

「サリアっ・・・!」

お願い、書類片付けるの手伝って!!」

「いや、だって・・・ねえさん、私にも仕事が」

「あんた仕事と姉さんの命とどっちが大切なのよっ!

いいから手伝いなさい!」

言いながらサリアの白衣を引っ張って部屋に引きずり込もうとしている。

「何言ってますか! 私だって仕事終わらせなきゃ所長に何言われるか・・・」

「あんたは小言で済むでしょうけど、あたしは命かってんのよ!」
「?」

愚者の行進2

仮にも研究施設内の廊下で大騒ぎを続ける二人。

しかも、ルメル部屋が有る棟は、上級研究員達の執務室が有る執務棟だ。

普段からこんな調子で大騒ぎをしているので廊下を歩く研究員たちは「またルメル女史か」といった顔をして彼女たちの前を通り過ぎていく。

ただ一人、対面の柱に背をもたげて2人のやり取りを眺める長身の黒髪の男性を除いて。

「もうっ！いい加減に・・・あ」

「い、い、か、らあっ・・・手伝いなさいってば！」

長身の男性は、小さなため息をついて2人に歩み寄っていく。

「ルメル姉さん」

自分の背中を押して部屋に押し込もうとしている姉に、振り返り、微笑みかけるサリア。

「サリア・・・手伝ってくれる気になったのね！」

切羽詰ったルメルにとって、妹の助力は神の贈り物に等しい。

このとき、彼女にはサリアが迷える子羊に救いの手を差し伸べる天使に見えていたことだろう。

「ご愁傷様です」

しかし、微笑の真意を理解できていない哀れな羊に、偽天使の無慈悲な一言。

「・・・へ？」

直後、呆氣に取られているルメルの肩に、ぽん、と手が置かれた。

「・・・ルメル姉さん？頼んでいた書類はどうになりましたか？」
そして耳元で低い男の声。

「おひゃあ！！」

突然耳元で囁かれる声に頓狂な声を上げるルメル。
至極当然の反応である。

「・・・まさか、仕事が終わっていないなんてことは・・・
ああ失礼、姉さんに限ってそんな筈ありませんよねえ？」

ガーラントはルメルの耳元で静かに、低く囁きながら指を首筋へと
這わせる。

「え？そ、そうね・・・書類ね・・・」

ルメルは体を強張らせ、振り返ることも出来ずに曖昧に返事をした。

「・・・」

首筋に当てた指先をくると円を描くように動かしながら、ガー
ラントはサリアの様子を眺める。

彼女の視線はあちこちに泳いでいて、数少ない体の露出部分を見る
と、少し汗ばんできているのが見える。

結構な緊張状態にあるようだ。

「・・・まあ、ねえさんに限って終わっていないはずがありませんよ

ね。

少なくとも明日の朝までには書類を提出していただけたらと思っ
ますよ、私はね」

それだけ言って、ガーラントはルメルにっこりと笑いかけると、
ゆっくりと離れた。

弟の圧迫面接から開放されると同時に、ルメルは白衣がバサツと音
を立てるほど早く振り返り、身構えると、裏返った声で弟を諫める。

「あ、あんたねえ！？あんまり無遠慮に女の体を触るんじゃないわ
よ！」

「そんな・・・姉弟のスキンシップじゃないですか。

昔は良く一緒に風呂に入ったりしたのに・・・ねえ、サリア姉さん
？」

ガーラントは涙声を作り、ハンカチで涙を拭う仕草を取りながら、
その場を去ろうとしていたサリアを不意に呼び止める。

「えっ・・・そ、そうねー・・・」

火の粉を被る前に逃げようとしていたサリアは、体をびくりと震わ
せて立ち止まった。

「・・・さて、姉上方、久しぶりに紅茶でも飲みながら話しません
か？

うちの“隊員”にそういうのが得意な者が居りましてね。ちょうど
私の部屋にお茶菓子を持ってきているんです」

「あ、ああ・・・そうねえ・・・でも私は残念だけど仕事が・・・
」

仕事を口実に逃げようとするサリア。

「おや、それは残念・・・」

でも、まさかルメル姉さんはそんな事ありませんよねえ？」

笑顔で姉を脅迫するガーラント。

見れば、サリアは難を逃れたとばかりにため息をついて胸を撫で下ろしている。

「うぐ・・・し、仕方ないわね・・・」

文字面通り、苦虫を噛み潰したような顔をしながら、ルメルは弟の申し出を受けた。

「ああ良かった。」

・・・ではルメル姉さん、隊舎に有る私の部屋までご足労ください。私は準備が有るので先に行って待っていますから」

ガーラントは満足げな笑みを浮かべて踵を返し、黒い長髪を揺らし、て隊舎の有る区画の方へ歩いていく。

「あ、私も仕事に戻りますね。ルメル姉さん」

嵐は去ったとばかりに清々しい顔をしてサリアも仕事場に戻っていた。

対して、ルメルはといえば心中穏やかでない。

（この裏切り者めー！）

足早に去っていくサリアの背中を恨めしそうに睨む。

「ああ、もうっ！」

サリアは少々声を荒げて書類が乱雑に散らばった部屋に駆け入り、机の上から一枚のデータディスクを掴んで白衣のポケットに入れた。

「ああ・・・なんであんな悪魔みたいな子になっちゃったのかしら・・・」

小さいときは可愛かったのに・・・」

誰にともなく、ぶつぶつと文句を言いながら、ポケットに突っ込んだディスクを握り締めて、ルメルは散らかったままの自室を後にした。

愚者の行進3

一方、ガーラントは“隊舎”に有る自室でルメルを待っていた。

自室といっても、彼の研究所での生活スペースはここだけなので相応の広さが有る。

入り口の扉を開けたすぐ先が応接間となっており、いま彼が居るのが応接間である。

執務もこの部屋で行う為、少々装飾過多な執務机と応接用のソファ―、テーブルセットが置かれている。

花や観葉植物が部屋の所々に置かれているが、これらはガーラントの趣味ではなく、もう一人の“同居人”の趣味によるものだ。

執務机の後ろには、カーテンで隠れているが扉が二つあり、左の扉の先はキッチンで、右の扉の先は寝室と浴室に繋がる廊下である。

ガーラントは応接用のソファ―に脚を組んで座り、書類に黙々と目を通している。

「・・・・・・」

静かな空間に、ぱらり、ぱらり、と紙をめくる音。

ゆらゆらと紅茶から立ち上る湯気と、定期的に刻まれる紙の音のリズムに、時間がゆっくりと流れているような錯覚すら覚える。

静寂――――

しかしその静寂も長くは続かないようだ。

それなりにこの静寂を気に入っていたのだろう、彼は少し残念そうに、ひどく迷惑そうにキッチンに繋がる扉に目をやった。

キッチンの扉がカタカタと小刻みに揺れだしたのだ。

だるさを表情の全面に押し出して、何か思案するように天井を仰ぐ。

そうしている間に、先ほどまでは小さく震えているだけだったキッチンの扉が、ドオン！と大きな音を立てて振動した。

「・・・・・・・・チッ」

ドンドンと大きな音を上げながら歪む扉に、目は天井にやったままで舌打ちをする。
と同時に、

ドガン！

と一際大きな音を上げて扉が開き、ゴロゴロと“何か”が転がり出てきた。

転がり出てきた“何か”は床の上でじたばたしたり呻いたりしている。

「ふぐーっううう！

むううーっ！」

それは——ロープで縛られて猿轡を咬まされた女性だった。

「まったく、五月蠅い人ですね・・・

縛られているときくらい大人しくしてほしいものですが」

眉間に皺を寄せ、忌々しそうに目を瞑って平然と言つてのけるガーラント。

「むぐーっ!!」

ふむううう!ふむっ!」

文句を言いたげに・・・というより今まさに言っている所だろう。縛られて床に寝転がっている女性は、ガーラントを涙目になりながらも睨みつけて唸っている。

「あー五月蠅い五月蠅い。

どれ、もう一度キッチンに押し込んでおきましょうか」

「むがっ!?むぐぐーっ!!」

ガーラントは紅茶の入ったカップを片手に女性をキッチンへと転がしていく。

しかも脚で蹴って。

がすっ!がすっ!

「むぐっ!ふむっ!」

蹴りが入るたびに呻き声を上げる女性。ガーラントが履いているのはレザーブーツの為、かなり痛そうだ。

「しかし姉上殿も遅いですねえ。そろそろ来ても良い頃ですが・・・

」

呟いている間も女性を蹴って転がしているガーラント。

キッチンに押し込むと言う目的は失念したのか、それとも蹴る口実だったのか、キッチンのある扉と真逆の方へ転がされる女性。

「むぐぐ・・・むぐ?」

目を回してぐったりしていた女性の瞳には何が映ったのか、突然生

気が宿る。

女性の視線の先にガーラントが目をやると、扉が開いており、ルメル女史が部屋に入ってきていた。

「ああ、姉さん。

やっと来てくれましたか。」

ガーラントが女性を踏んだままルメルに声を掛けるが、呆然とした表情をしたまま反応が無い。

——このとき、ルメル女史の目に彼らはどう映っていたのか。

床には頬を赤らめ、瞳に涙を浮かべて縄で縛られている女性。

女性は顔立ちに幼さを残すものの、美しいと言って遜色無い美人で、服は乱れて・・・というより、はだけている。

露出した白い肢体に、長く艶やかな黒髪が絡みついている様は妖艶の一言に尽き、乱れた前髪の隙間から覗く蒼く透き通った瞳がいつそう色香を漂わせている。

そしてその女性を土足で踏みつけている自分の弟。

何よりも問題なのが、女性を縛っている縄の縛り方である。

——亀甲縛りであった。

だがどこからどう見てもSMプレイである。

「あ・・・あんたって子はああああ!!!」

何を想像したのかたやすく分かるほどに顔を赤らめ、激昂するルメル女史。

「急にどうしました?そんなに大声を出して・・・」

平然と激昂した姉に応じるガーラント。

「あああああんだねえ！フィオナちゃんにまで手を出すなんて・・・！

今までは黙っていたけど、どうやら姉として、あんたを再教育する必要があるようね・・・！」

怒気が視覚として認識できそうなほどに怒っている。

「ああ、やっぱりそういう勘違いを・・・

安心してください姉さん。私が本気で喜ばせたいのは姉さんだけですから」

ルメルの部屋の前でサリアが見せたのと同じ、極上の暗黒微笑を浮かべて姉を宥めるガーラント。

「・・・え？そう・・・それならまあ・・・

・・・って違うわ！つうか本気であたしが喜んでたと思ってたのかアンタはあ！」

激昂しているルメルに対して、ガーラントは一人で百面相をやってのける器用な姉に感心しながらも、あくまで落ち着いている。

「と、とにかく！はやく縄をほどきなさい！

話はそれからじゃないと聞いてあげないからね！」

「仕方ありませんね・・・

自由にしても五月蠅いだけなのですが・・・」

ガーラントはしぶしぶ姉の命令を承知すると、パチン、と指を鳴らした。

すると突然、フィオナと呼ばれた女性を縛る縄からギシギシと音が鳴り始めた。

力づくで縄を破ろうと力を入れているのだ。

——ぎ、ぎぎ、ぎぎぎぎぎい——

と、おおよそロープが引きちぎられるには似つかわしくない音が。そして、バキンッ！と大きな音を立てて彼女を拘束していた縄がはじけ、がらんがらん、と明らかに金属質な落下音を立てながら残骸が床にちらばった。

「——ぷはあ！

酷いじゃないですか隊長！ひとに準備させといて気絶させた挙句にこんなあ……」

彼女は涙声で訴えるが、ガーラントは彼女の方を見もせず、平然と語りだす。

「うーむ、どんどん人間離れしてきますね……

一応鋼糸……いや縄だから鋼縄ですか。

まあとにかく、その太さの金属繊維を無理やり引きちぎるなんて重機でも使わなきゃ出来ないんですがね」

「あんたねえ……部隊員とはいえ女の子になんて真似を……」

「あああつ、そうだ！先ほどの優しいお言葉、この身に余りまります！ルメル・アーメッシュ第2区画長殿っ！

名前を覚えていただけてるなんて光栄ですっ！フィオナ・アシュ・フランベロジュ2等魔導師です！」

少しのぼせ上がったように早口でまくし立てるフィオナ。

舌ったらずなのに早口で喋ろうとするので、発音が妙なことになっているが、不思議と愛くるしい。

しかしいつか思い切り舌を噛みそうで危なっかしい、なんとも構いたくなる人間だ。

愚者の行進 4

「まあ立ち話もなんですから、どうぞ座ってください」

「ん。そうさせてもらうわ」

言いながら応接用のソファに脚を組んで座る二人。

「・・・あ、わたし紅茶を淹れてくるれすー」

ソフィアはそんな二人の様子を数瞬ぼうっとして見ていたが、すぐにそう言っただけだと軽い足音を立てながらキッチンへと消えていった。

この二人、ただ普通に足を組んで座っているだけなのだが、ルメルは身長がほとんどガーラントと変わらない上、本人達の態度も相乗して、やたらと威圧的な雰囲気が出ているのだ。

そんな空気の中で、先に口を開いたのはガーラントだった。

「では、本題に入らせてもらいますね、姉さん」

「・・・」

ルメルは何も言わず、ソファの背もたれに仰け反るように背中を預けるだけである。

ガーラントは姉の反応に気を留めることも無く、抑揚の無い声色で話を続ける。

「前々から有った話です。南部“粛清”の件ですよ。実は私の“隊”に任が回ってきましてね・・・」

“粛清”とはオーメッド研究所の任務略称の一つで、いわゆる殲滅戦である。

研究所からなんらかの支援を受けている組織、団体が研究所の技術を悪用したり、研究所に対して何らかの敵対行動を取った場合に、よくこの任務略称が使われる。

「ああ、またあんたのトコにいったのね、あの話・・・
いつも大変よね、あんたの“隊”は。厄介ごとばかり押し付けられてさー」

「ええ、まったくその通りです」

言葉とは裏腹にさほど大変そうでもない風に相槌を打ち、話を続けるガーラント。

「特に今回の粛清は少し特別でして・・・

ノビス・カルヴァリイ社の魔素協定違反に対する周辺組織との共同作戦行動なんですよ」

「へえ、あの会社は結構良い製品作るんだけどね。何の項目を違反したわけ？」

「なんでも魔素プラントの生産制限量過多と、大気中の規定魔素濃度過多だとか」

魔素協定とは魔素を扱う上で、これ以上環境に悪影響を与えないよう、各国、各組織間で結ばれた魔素の取り扱いに制限をかける取り決めのことである。

「ああ、要は適当な言い掛かりつけてタコ殴りにする気なワケね」

ルメル的身も蓋も無い物言いに、まあ、否定はしませんが。とガーラント。

今回の粛清の背景を分かりやすく言えば、地球温暖化対策にCO₂を押さえましょう、といった程度の規定を違反したから制裁として殲滅します。と言っているようなものだ。

実際問題として魔素濃度の上昇によって環境に与える影響はCO₂とは比較にならないが、それでも今回の作戦の影にはちらほらと暗い政略が見え隠れしている。

「・・・それで、ですね。

色々手回したんですが、どうしても私の参戦許可が下りないんですよ。

仕方ないので姉さんのところから代わりになる物をお借りしたいと思いますして」

脱線した話を戻すガラント。

「まあ貸すのはかまわないけど、あくまで秘密裏にお願いするわ。軍部に手を貸すと周りの研究区が良い顔しないからね、あたしに迷惑かけんなよー？」

「ええ、もちろん」

研究所内では軍部と研究部の間に軋轢があり、軍部が研究部に軽視されがちな傾向にある。

その原因は研究所の成り立ちと関係があるわけだが・・・

オーメッド独立研究所はどの国家、組織にも所属しない、巨大な研究機関の集合体だ。

もともと、研究所の母体は創始者であるオーメッド博士を中心とした研究者集団の所有する飛行艇だったが、魔素の研究を進めるうちに志を同じくする他の研究機関が彼に合流し、施設の増設を重ねていくうちに、まるで巨大な城塞のようになってしまった。

ただ普通の城塞と違ってオーメッド研究所は高度1，5キロほどを浮遊しているし、移動する。

もともと飛行艇を母体としているからということ、おもしろがっ

た研究者達が魔改造を施していった結果らしいが、地上の魔素汚染が進んだことにより、他の都市や施設の生活区域が汚染の届かない高高度に建設されるようになったため、幸か不幸か時代の最先端を行っていたことになる。

また、独立しているがゆえに孤立しており、そのために研究所のただけで社会活動が成立している点で、一種のコロニーと言っても良いだろう。

研究所は円状の地盤を塔が貫いたような形をしており、プレートの上はおおまかに生産区、居住区、研究区の三つに分かれ、まるで樹木のように上部に向かってビル群を伸ばしている。

中央を貫く塔は上下の移動のためのエレベーターを兼ねており、塔上層部は管理局とされている。

プレートの外環には巨大な研究所を離陸させ、バランス維持するためのスラスターが大量に設置されており、下部には離陸後にスラスターを使わなくとも浮遊できるよう、重力制御装置が設置してある。

ちなみに、この重力制御装置が完成する以前は研究所に脚が生えていたらしい。

『常に探求者たれ』——誰の敵にも味方にもならず、唯一未知の解明だけを目的とする、という理念を掲げてはいるが、研究材料や魔素の供給だけは外部から取り入れなければならないため、たびたび諸国家、外部組織と抗争を引き起こしており、内外に敵は多い。

もともと研究部が母体であったために、研究部は軍部を軽視しており、敵対組織の殲滅や研究所の防衛、研究材料の確保という名目で汚染された地上任務にあたるなど、研究所をとりまく様々な危険の

矢面に立つ軍部は、自分達を軽視する研究部を快く思っていない。

そして『誰の敵にも味方にもならない』という理念が、常に何かを守り、何かに敵対しなければならぬ軍部と噛み合っていないという点、この理念と存在の矛盾も軋轢を生む原因の一つなのだろう。

愚者の行進5

「隊長、ルメル女史、お茶が入りましたれすよ」

話もひと段落したかというところで、フィオナが紅茶とケーキを乗せたトレイを両手で持ち、キッチンからでてきた。

「おー。ありがと、フィオナちゃん」

ガーラントとルメルの前に紅茶とケーキを順々に置くと、自身も空いている席に腰を下ろす。
ちやつかりと自分の分の紅茶とケーキも用意してある。

それを見て、ガーラントは軽いため息をつく。

「フィオナ」

「なんれふか」

ケーキを頬張りながら返事をするフィオナに、にっこりとガーラントは笑いかけ、

「後で反省室行きです」

とあっさり言っただけだ。

「ぬあっ！？なんれすかー！？」

ケーキを頬張ったままフィオナは反論するが、ガーラントから返ってきた返事は、なんでもです、というシンプルなものだった。

「んー・・・良い香りだわあ」

ルメルはといえば、完全に紅茶とケーキに意識が集中している。

「それで姉さん、お借りするものですが・・・」

「わかってるわよ。魔動機兵でしょ？ちゃんと今手配してるわよ」

ルメルは紅茶を口に運びつつ、空いている左手で白衣のポケットから携帯端末を取り出し、なにやら操作をしている。

「そうですか、いつも助かります。」

ガーラントはそう礼を言って、紅茶に手を伸ばす。

「隊長、失礼するぞ」

ティーカップを手にとって口に運ぼうとしたところで、急に彼の部屋の扉が乱暴に開かれ、女性士官用の軍服を着た女性が入ってきた。

身長は160センチほどだろうか、女性の平均身長より少し高いくらいのようなだ。

ポニーテールに結んであるダークレッドの髪に、ルビーのような紅の瞳。

軍人らしさか、眼光は猛禽のように鋭く、本人の不遜な立ち居振る舞いも相まって少々高圧的な印象を受ける。

「・・・む、取り込み中だったか。席を外した方が良いか？」

女性士官は部屋に入ってから、「しまった」というような顔をするのと、人差し指で頬をぽりぽりと掻きながらガーラントにたずねる。

「お、ベルちゃんじゃん。やつほー」

「お久しぶりであります、ルメル女史」

気の知れた風に女性士官に声を掛けるルメルに、敬礼で返す女性士官。

「え！？副隊長！？」

対して、紅茶を飲みながら私服の表情を浮べていたフィオナは女性士官に気づくと、今までどうって変わって、ぴしつと姿勢を正した。

「構いませんよ。ベル」

「そうか、すまん」

ベルと呼ばれた女性士官は扉を閉めると、誰に促されるでもなく、どかっとソファに腰を下ろした。

彼女の名はベリアル・ベルガモット。ガーラント率いる部隊の副隊長を務める女性である。

おいそれと前線に立つことが出来ないガーラントの代わりに作戦行動を取ることも多く、同部隊内にも関わらず、彼女自身のチームを作ることができるほどの実力者である。

フィオナはベリアルのチームに所属しているわけではないが、ベリアルがガーラントの代わりに部隊員の調練を行うことも多く、フィオナにとって彼女が厳しい上官であることに代わりは無い。

「・・・あ、あの・・・わたし、紅茶を淹れてくるれすっ！」

ガーラント、サリア、ベリアルと、上官達に囲まれて気まづくなっただろう、フィオナはそそくさとキッチンに入っていた。

「すまん、フィオナ二等魔導師」

ベリアルは礼を言おうと脚を組みつつ、胸ポケットからタバコを取り出し、啜えたところで火が無いことに気がついた。

「・・・む、ライターはコートのポケットか」

「ベルちゃん、火くらい貸すわよ？」

タバコを戻しかけるベリアルに、ルメルが自分のライターを取り出して火をつけようとする。

「ああ、ありがとうございます。ルメル女史」

タバコを啜えなおし、火に近づけようとするベリアル。
だが・・・

「待ちなさい」

と、ガーラントが言うのと同じ時。

音も無く、タバコのフィルターから先が、消えて無くなった。

愚者の行進6

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そのままの姿勢で固まり、無言でガーラントの方に顔だけを向ける二人。

「・・・人の部屋を勝手にヤニで汚そうとしないで下さい？」

ガーラントは固まっている二人にそれだけを言うと、紅茶に口をつける。

自分達の方を見ようとしめないガーラントに対し、あからさまに不満な表情で反論する被害者達。

「隊長、言ってくれば止めるのだ。むやみに魔術を使うのはどうかと思うぞ」

「そーよそーよ。そんなことだから行使制限なんかくらのよアンタは」

当の加害者とは言えば、ぶーぶーと口を尖らせる二人を横目でちらりと見ただけで、またすぐに紅茶を口に運ぶ。

まるで「言いたいことは有りますけど、面倒なので良いです」とでも言いたげな仕草である。

「む・・・隊長、その態度は」

「そんなことよりも、ベリアルは何か用があったのでは？」

ベリアルはガーラントの態度に対してさらに文句を言おうとしたが、

ガーラントは話を進めることでそれを遮った。

「む・・・そうだったな」

ベリアルはまだ不満がありそうな顔をしていたが、当初の目的を果たすことを優先することにしたようだ。

「実は先ほど、マリアとミシェルがまた問題を起こしてな・・・出撃の前に始末書を提出しに行かねばならんのだが、今のうちに他の事務も片づけてしまおうと思ってな。」

その間の教練を隊長に任せられないかと思ってここに来たのだ。」

マリアとミシェルはガーラントの率いる“独立魔導師部隊”の構成員で、軍部では有名な問題児である。

「それは構いませんが、またあの二人ですか・・・今回は何をしましたんですか？」

「・・・教練用の魔道機兵に無断で搭乗した上に私闘を始めて、その上魔動機兵2機を大破させおった」

思い出すだけでも頭痛がするのか、こめかみを押さえながら報告するベリアル。

「・・・はあ」

「・・・はあ」

思わずため息を漏らすベリアルとガーラント。

「・・・わかりました。すぐに錬兵場に向かいます。」

姉さん、お呼び立てしておいて申し訳ありませんが、そういうことですので」

「はいはいっと。そんなじゃあ、もうあたしは帰るわよ」

ルメルはそう言いながら立ち上がると、振り返らず、ぷらぷらと手を振って部屋を出て行った。

そしてルメルが出て行った直後に、フィオナがキッチンから顔を出す。

「あれ、ルメル女史はもうお帰りになったんれすか？」

ベリアルの中の紅茶とケーキを乗せたトレイを手に、キヨロキヨロと部屋を見回すが、ルメルはすでに出て行ってしまっている。

「フィオナ、午後の教練は私が担当します。貴女は先に錬兵場に行き、その旨を隊員に伝えるように」

「フィオナ、すまんが紅茶は私の執務室に運んでおいてくれ。

・・・隊長！私も失礼するぞ！」

フィオナに用事を言いつけてすぐに私室に入っていたガーラントに聞こえるように声量を上げ、ベリアルはコツコツと靴音を廊下に響かせて部屋を出て行ってしまふ。

そうして、ガーラントの執務室にはフィオナが一人、取り残された。

「・・・はい？」

二人から一度に用事を言いつけられたフィオナは、ぽかんとその場に立ち尽くしている。

すると私室の中から、ばさばさと服を着替える音と一緒にガーラン
トの声。

『私が着くまでに用意が出来ていなかったら全員罰則ですからね』

「いいっ!?!り、了解すー!」

フィオナは返事をする、風を切る音が聞こえそうなほどのスピー
ドで駆け出した。

愚者の行進7

十数分後、研究所の下層にある錬兵場——正確には、オーメッド研究所第三階層にある仮想戦闘訓練室に、フィオナがものすごい剣幕で駆け込んできた。

「・・・ま、間に合っ・・・」

ぜいぜいと肩で息をしながら、その場にへたりこむ。

「た・・・たいっ・・・たいちよ、隊長がっ・・・」

顎を上げ、荒い呼吸のまま喋ろうとして、言葉が途切れ途切れになってしまふほどに疲労困憊した様子が見て取れる。

オーメッド研究所の階層構造は、第一階層がいわゆる地上——と言っても、実際は高度2，5キロほどだが——であり、生産区や研究区、軍部隊舎が建てられている階層で、現在彼らが居る第三階層に錬兵場、第二階層に実験施設が設置されている。

各階層の移動は各所に設置されたエレベーターやゴンドラを用いるのだが、問題は区画間の移動であり、一区画を徒歩で移動しようとする30分近くかかってしまう。

そのため、各所に移動用のゴンドラが設置されていたり、施設内用のフロート・バイクを貸し出す施設が有るのだが・・・

「フィオナ・・・？どうしたの一体!？」

設備のコンソールを操作していた金髪の女性が、へたり込んでいる

フィオナに駆け寄ってくる。

すると、それをきっかけに「なんだなんだ」と周りの人間が集まってきた。

「あれ、フィオナって隊長に呼ばれてたんじゃなかったのか？」

「ほら、タオル・・・と、今何か飲み物持ってくるよ」

設備から上半身だけを乗り出してフィオナに声を掛ける、明るそうな青年に、落ち着いた様子でタオルを投げてよこす女性。いずれもガーラント率いる独立魔導師部隊のメンバーらしい。

「しかし、どうしたんだよ。そんなに息を切らして」

「・・・ゴッ・・・ゴンドラ・・・乗れなくて、走って・・・きたっ、から・・・」

「はっ、走ってきただあ！？隊舎からここまでか！？」

ゴンドラは各所に設置されているのだが、第一階層と第二階層は居住区画と研究区画があるために渋滞しやすく、常に長蛇の列が出来ていて、乗るのに時間が掛かってしまうのだ。

しかも研究所内の地位によって使用できるゴンドラのランクに差があったり、幹部や上級研究員の乗降が優先されるため、フィオナは乗降の順番を弾かれてしまったのだろう。

ところで、ガーラントの部屋がある隊舎は第一階層にあり、訓練室は第三階層にあるわけだが・・・

「はい、水。あんた、また外壁の抜け道使ったの？」

水筒を受け取るなりゴクゴクと喉を鳴らしながら水を飲むフィオナに、少し心配そうな顔をして訊ねる女性。

ごくごくごくごく……

が、当のフィオナはまるで耳に入っていないらしく、一心不乱に水を飲んでいる。

「……聞け！」

がつんと鉄拳をフィオナの後頭部に食らわせる女性。

「ごふあっ!?! な、何をするんれすか!?!」

「うおおっ!?!」

フィオナは殴られた反動で、身を乗り出していた青年の顔に水を盛大に噴出しながらも反論する。

「ちょ、ちよつとマリアっ! あんまり乱暴したら可哀想じゃないの!」

金髪の女性はマリアと呼ばれた女性から守るようにフィオナを抱きしめる。

「フィオナ、これどうしてくれんだよっ」

フィオナに水を掛けられた青年は髪から水滴を垂らしながら文句を言うが……

「うう・・・やっぱりわたしに優しくしてくれるのはラッカちゃんだけなんです・・・」

当のフィオナはぎゅーっとならつかと呼ばれた金髪の女性に両腕で抱きついていて、まったく聞いていない。

「おいっ・・・人の話を」

「はっ！こうしている場合ではないです！皆さん、緊急事態ですっ！」

はっと我に返ったフィオナはラッカから離れると、すっと立ち上がって部屋に居る全員に聞こえるように大声で叫んだ。

「なななんとおっ！午後の教練の担当がガーラント隊長になってしまったです！」

「！？」

「！？」

「だから人の話を・・・って何い！？」

その場に居る全員がそれを聞くなり、まるで世界の終わりが来たとしてもいような表情を浮べて、凍ったように固まってしまった。

シミュレータを使用していた隊員達も同様に固まってしまい、次々にコンソール上に「機体大破」というメッセージがアラートと共に連続して表示されていく。

そして、けたたましくアラートが鳴り響き、隊員達が立ち尽くす中、訓練室の扉が大きく開け放たれた。

「・・・君達。一体何をやってるんですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273k/>

ガーデンボックス

2011年10月6日17時46分発行